内外教育　第6830号

ウンジラ

新型コロナ危機後の教育

○…重い病気になった時は、自分にとって何が重要なことなのかに思いを巡らす。そのような時こそ、本当に大切なものに気が付く。しかし、病気が治り死の恐怖が去ると、危機的状況の時に考えたことは忘れ、元の便利や功利を求める生活に戻ってしまう。

○…今、新型コロナウイルスの世界的流行で、私たちの日常生活は一変し、重い病気にかかったような状態にある。そのような時こそ、何が大切なのか、何が重要なのかを考えたい。

○…新型コロナの感染拡大は、社会の諸分野に影響を及ぼしている。教育の世界への影響も大きい。とりわけ、長期にわたり学校が休校になったことは、学校中心の生活を送っていた子どもたちの生活を一変させた。その影響は計り知れない。休校になり、授業、遊び時間、部活動、交友関係も無くなり、子どもたちの学習や楽しみが奪われた。そして、学びの社会的格差が拡大している。これまで学校が担ってきた教育機能の重要性が、平等性も含めて改めて認識される。コロナ後は、この間に滞った教育機能の補修、回復や格差の是正が、まず早急になされなければならない。

○…一方で、自明であった学校教育の意義も問われている。効率優先の一斉授業、生きる力にならない知識、教師のクラスメートへの叱責を聞く時間、退屈な学校行事、無意味な校則など、無くなってみるとスッキリすることが多い。これまでの学校教育の在り方の見直しが必要である。

○…休校中の家庭での自由な学習、親子関係の親密化、ウェブ学習、地域での遊びの回復など、これまでの学校教育とは違った自由な学習や生活に、本来の興味や活動に目覚めた子どもたちも多いことであろう。不登校やホームスクーリングも見直されてよい。

○…黒板とチョークを使っての学校での授業に替わり、家庭での遠隔学習を経験した子どもも多い。デジタルネーティブの今の子どもにとって、デジタルで学ぶことの楽しさは増している。コロナ危機後の教育では、デジタル学習が家庭でも学校でも盛んになることは必然である。しかし、教育のデジタル化には多くの課題がある。子どもの集中力や深い学びには、ウェブ学習より伝統的な教育（紙と黒板）が適合的という報告もある（デジタル先進県の全国学力・学習状況調査の得点は高くないことなど）。

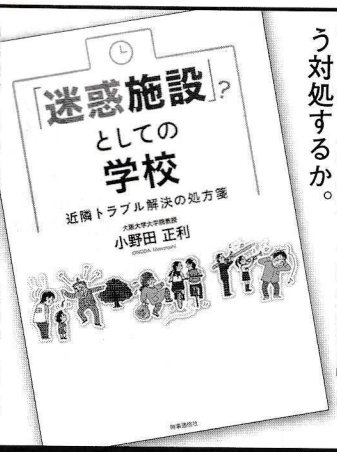
○…コロナ危機は、経済や政治の分野で大きな変化をもたらし、教育にも跳ね返る。経済的な不況による教育費の削減、危機管理を名目にした超管理社会の到来など。これからは、教育力の維持、教育的格差の是正、民主主義の維持などがなされなければならない。（Q）

武内

「迷惑施設」としての学校
近隣トラブル解決の処方箋
小野田正利［著］

飛び交う理不尽クレーム
音楽鳴らすな　マイク使うな

近隣トラブルに悩む学校、幼稚園、保育園が近年増加。「要望」→「苦情」→「無理難題」にどう対処するか。



「学校イチャモン研究」の第一人者が日本各地で起こっているトラブルを元に解決方策を提言。
●四六判・208頁●本体価格1400円（税別）

時事通信社　時事通信出版局 営業企画部　東京都中央区銀座5-15-8 時事通信ビル　TEL 03-5565-2155　https://bookpub.jiji.com/

N02

内外教育

2020年（令和2年）8月4日（火）　第6848号
（購読料金　税抜月額4,000円）

●昭和21年12月12日　第3種郵便物認可●毎週2回火・金曜日発行（但し祝日等を除く）●発行所　〒104-8178　東京都中央区銀座5丁目15番8号　時事通信社

©時事通信社2020

誌面内容に関するお問い合わせ（編集部）　educate@grp.jiji.co.jp
ご購読に関するお問い合わせ（業務管理部）　dokusya@jiji.co.jp

時事通信社

目次

〈教育長はこう考える〉
青木千津子栃木県栃木市教育長に聞く
地域の教育力を学校運営に……2～3

〈学校をカエル〉
第5回　コロナ禍の残業時間
内田　良・名古屋大学大学院准教授……4～5

〈地方の動き1〉新型コロナ下でも授業を
見えた成果と課題―鳥取県……6～8

〈地方の動き2〉運動会、修学旅行で「密」回避
アフターコロナの取り組み―堺市……9

ポストコロナの学びの在り方議論
教育再生実行会議……10

学力保障で教育課程工夫
全連小が第72回総会を紙上開催……11

オンライン授業のノウハウ共有を
超教育協会が講演会……12

〈わたしの学校経営〉
進士五十八・福井県立大学学長……13

〈本〉対話力……14

〈アンテナ・スポット〉▷顧問の暴言との因果関係認定▷通学定期券の有効期間延長に補助▷独自学力調査、小中の84%参加▷小中トイレ蛇口を自動水栓に▷中学生向けに公立高動画サイト▷全体育館に大型サーキュレーター▷オンライン履修のみの新規留学認めず▷文科省、大学入試「主体性評価」サイト停止へ、など……15～19

〈ことば・ワンポイント〉MOOC（ムーク）……19

〈ラウンジ〉高校改革の目玉違い……20

大学の遠隔授業の効用

――敬愛大学客員教授●武内　清

ひとこと

新型コロナウイルス感染症禍で、大学は新学期より遠隔授業を始め、そのまま継続した大学が多い。学生の通学時の過密を避けたいという理由が主なものであろう。また、遠隔授業を行う設備とデジタル能力が、教職員と学生にあったということでもある。

遠隔授業には大きく2種類あり、一つは「Zoom（ズーム）」のように同時配信、双方向の形態、もう一つはオンデマンドの形態。学生からは、遠隔授業に対しては「皆と一緒に勉強したい」など不満も聞かれるが、授業満足度は高い（敬愛大6月調査「満足」83％）。

教室での授業より遠隔授業の方が、学生の自主的学習時間が増えるということも指摘したい。昨年11～12月に行われた文部科学省の「全国学生調査」によれば、日本の大学生は授業にはよく出席する（週に11時間以上出席72％、平均17時間）。しかし「予習、復習、課題など」をする学生は少ない（週に5時間以下が67％、平均5時間）。

米国の大学には、学生を勉強させる仕組みが整備されている。各授業の必読文献が配布され、図書館、討論、ノートの点検、リポート、試験問題と、必読文献の熟読がおのずと促され、学生の自主的勉強時間は長い。日本の大学でも授業改革が行われているが、その成果は上がっていない。それが遠隔授業で様変わりした。

遠隔授業になると通学時間、友人との私語、教師の叱責や無駄話等がなく、学生は授業の内容や課題に集中でき、自主的学習時間が確実に増える。スマートフォンをいじったり私語をしたりして授業をやり過ごすことはできず、課題の文献を自分でじっくり読み、リポートを書き試験を受けざるを得ない。ネットを介しての教員との意見交換も増える。

今後は遠隔授業も定着して、大学での授業との併用になることが考えられる。これを契機に、日本の大学の授業や学生の学び方が変わることを期待したい。

本誌掲載記事・写真などの無断複写、複製、転載を禁じます。

NO 3

内外教育　第6866号

ウンジラ

遠隔で対話的な深い学びを

○…新型コロナウイルス感染症禍で、これまで日常的に難なくでき当たり前だったことができなくなっている。仕事や登校ができなくなったことが、一番の打撃だが、それ以外にも多くのことが不可能になった。コロナ禍が克服され、以前の日常が戻ってくることを願うしかないが、同時にこれを機に、当たり前の日常を疑い、過密を避け、遠隔でもできることを考える必要がある。

○…例えば、学校への登校は絶対必要なのであろうか。集団行動が苦痛な子どもは、ホームスクーリングでもいいのではないか。精神科医の斎藤環氏は、人に会うことの暴力性を指摘している。「私が日々している会議、授業、診察。それらもまた、暴力なのだ。私自身、そこに入る前に緊張したり、気が重くなったりする」と述べている（朝日新聞、2020年6月14日付）。

○…学校という場に通い、そこで多くの人に会い、苦痛に耐えるのは当たり前という考えを再吟味する必要がある。今の教室の形態つまり、教壇があり教師と子どもが向かい合って座るという形は、一望監視システムという刑務所をモデルにしたものである。この教室の形は、教師一人で多くの子どもを監視するには効率的な形態であるが、子どもに緊張を強いる暴力性を帯びている。学級は閉鎖的、半親密でいじめの温床でもある。学校でいじめに遭い自殺するくらいなら、不登校を選ぶべきという判決もある。遠隔教育で個別学習を経験した子どもは、周囲に気を使うことなく学びやすいと感じた人もいたであろう。大学の遠隔教育でも、学生の私語やスマートフォンへの逸脱がなく課題への集中力が増す。

○…一方、学級は教師と子どもの対話やグループ学習、部活動など、さまざまな直接の接触から多くを学んでいる。この代替は可能か。

○…学会や各種研修会も過密を避けて、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」などで開催されたところが多い。それは、遠方の会場に出向く必要がなく、パソコンの画面で、報告者や発言者と一対一で向き合う感覚で話を聞くことができる。音楽のライブ配信も、そのような臨場感がある。子どもたちの学びや活動も、同じような工夫ができないか。

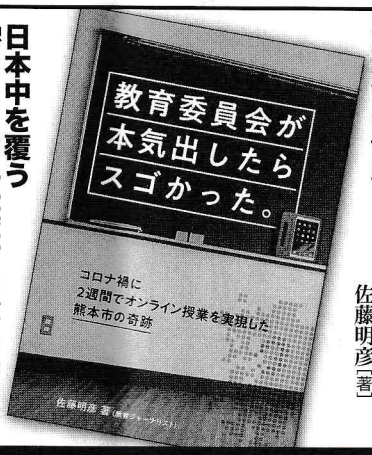
○…実際の密な対話がなくても、リモートの対話の方が、主体的で深い対話ができる場合がある。友人との授業中の私語や休み時間のたわいもない話はできないが、授業の課題をめぐっての教師や友人との遠隔でのやりとり、読書を通じての過去の偉大な人との「対話」は、深い学びに通じるものである。今の時代、デジタル、遠隔の道具を駆使して「主体的・対話的で深い学び」を推進したい。（Q）

武内清

教育委員会が本気出したらスゴかった。

コロナ禍に2週間でオンライン授業を実現した熊本市の奇跡

佐藤明彦［著］



日本中を覆う「ゼロリスク症候群」をぶっ壊せ！

- 3年前までICT後進自治体が4万7000人を対象にオンライン授業を実現
- 「平等に」ではなく「できるところからやる」
- 「LTE」でどこからでもネットに接続
- フィルタリングは最低限
- アプリや動画視聴の制限も一切なし！

コロナ禍で全国の学校が「機能不全」に追い込まれる中、市内全小中学校の約4万7000人もの児童生徒を対象にオンライン授業を実現し、教育・行政関係者を驚かせた「熊本市の奇跡」。

●四六判・208頁●本体価格1600円税別

時事通信社　時事通信出版局 営業企画部　東京都中央区銀座5-15-8 時事通信ビル　TEL 03-5565-2155　https://bookpub.jiji.com/

<参考> N04

内外教育

2019年（令和元年）10月8日（火）　第6780号
（購読料金　税抜月額4,000円）

●昭和21年12月12日　第3種郵便物認可●毎週2回火・金曜日発行（但し祝日等を除く）●発行所　〒104-8178　東京都中央区銀座5丁目15番8号　時事通信社

©時事通信社2019

誌面内容に関するお問い合わせ（編集部）　educate@grp.jiji.co.jp
ご購読に関するお問い合わせ（業務管理部）　dokusya@jiji.co.jp

時事通信社

目次

〈教育長はこう考える〉
中田好昭奈良県生駒市教育長に聞く
英語もフォントも先を見据えて……2～3
発達障害、本人の思い中心に
文科省「超福祉の学校」でシンポジウム…4～5
〈調査1〉高2の3割、校外で勉強せず
希望進路で差―文科・厚労省調査……6～7
〈調査2〉ネットリスクの指導が必要
綜合警備保障（ALSOK）の小学校教員意識調査……8～9
いじめ・指導自殺、11月も要注意
「ここから未来」シンポジウムで指摘……10～11
導入の意義を論議
国際バカロレア推進シンポジウム……12～13
〈特集2〉第34回「教育奨励賞」受賞校
▽優良賞
主体性育成し、子ども食堂を実現
③大阪府立松原高等学校……14～15
▽努力賞
生徒を育てる交流とボランティア
①東京都日野市立三沢中学校……16～17
〈評の評〉一般誌9月……18～19
〈調査3〉英語の指導に自信ありは約3割のみ
イーオンの「小学校英語教育に関する教員意識調査」……20
〈良書発掘〉……21
〈アンテナ・スポット〉……22～23
〈ラウンジ〉大臣がやるべきこと……24

ひとこと

現代学生考

敬愛大学客員教授●武内　清

これまで幾つかの大学で学生に接してきた経験から、大学と大学生に関して考えてみたい。自分の場合は、受験勉強を終え大学に入学して受けた授業はさっぱり心に響いてこなかった。それで大学外に知の源泉を求めた（読書等）。

1970年代後半に大学教師になり学生に接してみると、講義への出席率は3割程度と低く、大学生活の中心は友人関係とサークル活動であった（スキー、テニス、マージャンは定番）。学生たちは厳しかった受験競争の疲れを4年間のモラトリアムの期間に取り、企業戦士として社会に出ていった。企業も受験学力は評価したが、大学教育には何の期待もしていなかった。

90年代以降になると、大学の授業改革が進み「大学の学校化、学生の生徒化」が進行して、学生たちは素直になり、授業への出席率は急速に高まった。学生たちは授業から何かを学ぼうと考えたのであろう。情報化社会になり情報量が膨大となり学問が高度化しているので、どの分野でも基礎的な部分は学ぶ必要が生じた。それで知識は大学の授業から得るもので、大学外から学ぶという意識は薄れていった（読書の習慣がなくなった）。

「キャンパスの生態誌」（潮木守一著、中公新書、86年）によると、大学には「自動車学校型」「知的コミューン型」「予言共同体型」の三つがあるという。現代の大学は、この三つが薄められた形で存在していることを感じる。資格試験や採用試験に向けての知識・技術の習得（自動車学校型）、ゼミや演習の必修化（知的コミューン型）、主体的関与や行動を推奨するアクティブ・ラーニング（予言共同体型）。

さらに、デジタル環境の影響（スマホとゲームの世界への耽溺（たんでき））と社会的貧困からくるアルバイト生活が加わる。これらをバランスよく配置し、大学生活を送ることが、今の大学生に求められている。大学生活満足度は年々上昇しているが、学生の批判精神が薄れていることが気掛かりである。

本誌掲載記事・写真などの無断複写、複製、転載を禁じます。